

第23回 (R1. 11)

僥倖ぎやうこう

お彼岸の頃、土手や田んぼ道を鮮やかに彩る曼殊沙華。なぜか今年は開花時期が遅れました。そして十月に入ると金木犀が山吹色の花をつけたのですが、今年はいささか様子が異なりました。例年、澄みきった空気の中に濃密な花の香りが漂うのですが、今年ほとんど香りがないのです。さらに菊作り名人の話では、今年菊の成長が遅いのだとか。

花たちを取り巻く環境に何か異変が起こっているのではと思っていた矢先、東日本を豪雨が襲い、多くの人命が失われ、民家や田畑が泥の海に沈みました。科学の粋を集めた北陸新幹線の車両が水没し、都市文明の象徴でもあるタワーマンションが、あっけなく機能を失うなど、自然の猛威の前に我々はいかに無力であ

るかを思い知らされました。

ここ川津も、かつては大湿原を開墾した田畑が広がり、朝酌川も昭和50年代の改修事業完了までは、幾度となく氾濫を繰り返しました。幸いにして半世紀近く、水害を免れてきましたが、昨今の異常気象を考えると、絶対という言葉は慎まねばなりません。また、町内には土砂災害危険地域も多数存在する上に、かつての大湿原地帯の地盤は脆弱で大地震には弱いといえます。

今や日本は大災害時代に突入した感があります。もしも一生のうち、一度も被災することなく人生を終えることができれば、それは「僥倖」、即ち「偶然の幸運」というべきではないのか。そんな風に思える昨今です。